

リアリティの喪失が 震災後にもたらしたもの

谷口 ひとみ

はじめに

『津波で死ねばよかったのに。』とまで言われた。

2011年3月11日に起こった東日本大震災で転校を余儀なくされた子どもたちが全国の法務局が実施する「子どもの人権 SOS ミニレター」にそんな悩みを寄せているようだ。

「福島の子どもは公園で遊ぶな、保育園は入園拒否」こんな事態まで起こっている¹⁾。なぜこんなことになってしまったのか。

あの日私たちはテレビ越しに地震・津波の恐怖を知った。そしてさらに、福島第一原子力発電所で発生した水素爆発という信じられない事態も目の当たりにした。これらの災害・人災をメディアは大きく報道し、レスキュー活動やボランティア活動、募金活動が行われた。応援メッセージが東北に寄せられ、日本中、いや世界中がこの事態を見守る中で、被災していない人たちを含めた、日本中がこの震災を通して一致団結し、「絆」を深めたように思われた。

しかし、冒頭に述べたような、非道徳的で利己的な子どもたち・大人たちの発言は何なのだろう。私たちは「がんばれ東北」という想いのもとに、被災者たちのためにできることを考えてきたのではなかったのか。

いや、おそらく皆、被災者の方々のことを考えているとは思うのだ。しかし、いざ、まさにその大震災によって被害を受けた人たちが自分の現実生活の中に入り込んできたときに、その思いとは裏腹に、冷酷な行動をしてしまうのではないだろうか。それは、メディアが作りだす仮想空間と東日本大震災での津波・原発事故問題という複合的災害がもたらすリアリティのなさという2つのことに起因しているものと思われる。

以下では、なぜ被災者の方々に同情し、気持ちを寄せていたはずの人たちが、東北から避難してきた被災者たちにそのような対応をとってしまうのかということについて、「リアリティ」という観点から見ていきたいと思う。

メディアがもたらすリアリティの喪失

東日本大震災が起こった3月11日以降、ニュース・新聞といったメディアは来る日も来る日も震災のことを大々的に報道した。津波によって人や車、家などあらゆるものが飲み込まれた光景を私たちはメディアを通して知り、大きな衝撃を受けた。

私自身の経験を言えば、震災当日は奈良女の入学試験の前日であり、奈良の某ホテルで勉強中に地震を感じテレビをつけたところ、東北で津波によってたくさんの車が流されているのを見た。「すごいことになった」「これ本当に日本で起こってるの?」「かわいそう」と思いながら、画面に食いついていたのを思い出す。そして、現実はこの事態が日本のどこかで起こっていることは分かっているし、同情もするのだけど、なにか遠くで起こっているような感覚で見てしまっていた。それはメディアが作り出す仮想空間がもたらすものであると思われる。

ところで、1991年に湾岸戦争があったことは皆もご存じのことだと思う。それが今までの戦争と違うのは、メディアが戦争に介入し、戦争の様子を報道できたことであると言われている。それによって戦争の様子が衛星放送を使って、全世界に生中継された。これを見た人々は、夜空にミサイルの光が飛び交う状況や空爆などで破壊されたものを見て、「遠いどこかで戦争が起こっている」というふうに、どこか自分の生活とは関係ないものとして、あるいはゲーム的感觉でこの事態を見ていたのではなからうか。林利隆は、この「ゲーム的感觉」のことについて以下のように述べている。

私たちは、連合軍のミサイル攻撃をそれぞれの家に居ながらにして目の当たりにするという経験をしたのである。その映像に負傷者も死者も登場することはなく、映るのは高度なテクノロジーによって操られる電子的兵器だけであった。それはあたかもビデオ・ゲームを見ているかのような印象を私たちに与えたことによって、NINTENDO WAR とまで言われた。²⁾

同じようにこの大震災でも、私たちは津波などの被害を伝える映像や記事を見てきたが、海外メディアが報じるものとは違って、負傷者・死者を見ることはなかったため、ゲーム的感觉が強められたと言える。また、林はリアリティの希薄化に関しても以下のように述べている。

現実を虚構化した映像は、もう一つの現実である。花火さながらのミサイルの映像、流血や死者の不在の映像に、私たちは「戦争」というリアリティとは異なるいまひとつの現実—『漂白された戦争』(J・ボードリヤール)を見たのだ。³⁾

メディアは現実で起こっている戦争のリアリティを伝えようとしたにも関わらず、かえって非リアリティを感じさせてしまうという事態が生じてしまった。てしまい、この湾岸戦争の件で、メディアが作り出す「身近なものとして感じられない」「遠くのこととは関係ない」という想像力が明るみになった。

これと同様の事態が今回も起こっているとさえ言えないだろうか。テレビ・新聞越しに現地の様子を知った私たちは、日本国内の事件でありながら、この事態を身近に感じられなかったということである。

津波・原発事故問題がもたらすリアリティの喪失

前節では、メディアが作り出す想像力について述べたが、以下では、津波・原発事故問題がもたらすリアリティの喪失という観点から述べていきたい。

私たちは今まで津波というものを楽観視していなかっただろうか。今まで生きてきた中でわれわれは何度か地震を経験してきたと思うが、津波警報が出ても実際そこまで被害がなかったり、津波で多大な影響が出たようなニュースにあまり触れなかったこともあるかもしれない。だから私たちは震災で津波が残した痕のような光景を津波が引き起こすとは、頭ではあり得ると分かっているが、まさか実際には起きないだろうと思っていた。東北の人達も同様に予想だにしていなかった。

しかし、現実にはそれが起きた。私たちはこれを見て、現実感を喪失してしまった。こんなことが実際に起こりうるのかと、テレビ画面を見ながら、信じたくても信じられない気持ちでいっぱいになったのだ。

また、さらにその現実感を喪失を助長したのが、福島第一原子力発電所での水素爆発である。「安全」な原子力発電所が危機にさらされるなんて、そんなことはあり得ない。そう、思い続けてきた私たちの思いこみを見事に打ち砕いた。

ニュースでは水素爆発の映像が流れ、灰色の煙が上がっていく。そして、目に見えない放射性物質が飛散する…。9.11のアメリカの同時多発テロでビルが崩れていく瞬間に感じたような寒気・鳥肌を感じたものだ。現実

ではありえないと思っていた、この津波の威力と水素爆発という悲劇が私たちの感覚を麻痺させてしまった。

以上のものに加えて、リアリティの喪失に寄与していると強く思われるのが、放射性物質という「見えない存在」である。小川敏正は茨城県東海村での臨界事故に関して、「原子力事故は『見えない災害』だ。」と述べており、また、以下のようにも述べている。

『(臨界事故現場近くの)当の住民の一人である自分(ここではインタビューされている会社員)もテレビを見ているうち、この地域の人は大変だろうな、などと他人事みたいに思ってしまっただけです。』目に見える現場がないゆえの倒錯したリアリティーが出現した。⁴⁾

飛散した放射性物質は私たちに見えない。もしかしたら、東北にいない私たちのもとにも、もうすでに放射性物質は拡散されているかもしれない。だから不安だけがどんどん増えていく。イメージのみでしか放射性物質を捉えることができないために、リアリティをもってその存在を感じられず、不安だけが残る状況が生じてしまっているのである。

以上の津波・原発事故問題はこの震災に特徴的なもので、それらがもたらすショック、つまり、かつて見たことのない現場を見てしまったことによるダメージと、放射性物質という見えないものの不安要素が現実感を喪失させてしまっているのである。

リアリティの喪失と非道徳的行動の関係

以上、今回の震災経験に見られるリアリティの喪失について述べてきた。以下では、なぜ避難民に対する非道徳的な行動が、東日本大震災のときにおいて、特に顕著に表れ、深刻な状態になったのかということについて、リアリティの喪失を関連づけて述べていきたいと思う。

私は、この震災のことを、私たちが心の底から現実感を帯びたものとして感じられていないのではないかと述べてきた。それは、そこで暮らす人々に対しても同様である。私たちは被災者に大きな同情を寄せながら、彼らのことを遠くの人々と思ってしまっている。彼らが避難してくるということは、テレビ越しに眺めていたあの「自分とは関係ない」被災地に直接関係する人がまさに自分の現実世界の中に入り込んでくることである。

その瞬間に、現実と想像世界との間に大きなギャップが生じ、人々は、目の前にいる転校生を極端に言えば、想像世界の単なるモノのように見てしまい、その結果、非道徳的なことを平気でしてしまうのではないか。メ

ディアが作り出す仮想空間的な認識と東日本大震災がもたらした複合的な被害が、非リアリティ的なイメージを人に植え付けてしまい、そのことを現実のものとして受け入れられないがために、その地から引っ越してきた人達をも非リアリティ的な存在として、普通ならしないであろう行動を誘発してしまうのではないか。

また放射性物質について言えば、見えない放射性物質の存在のせいで現実感を感じられなくなってしまった人々は、その見えなさのゆえに主に福島からの避難民に対して、差別をしてしまい、放射性物質が移るなどと言って避難民を傷つけるのである。1つの例として、福島県から千葉県船橋市に避難した子どもが「放射線がうつる」などと言われ、いじめられたというケースがある⁵⁾。暴力を受けて入院する事態にまで陥ったケースもある。このような扱いが震災後に横行してしまっているのである。

おわりに

以上、なぜ震災後に、避難民に対するいじめや拒否といったひどい扱いが増えたのかということについて、メディア報道が震災を身近なものとして感じさせない仮想空間を作り上げたこと、この複合的災害が凄惨な映像を見せたこと、放射性物質が見えない存在だったこと、それらによって人々はリアリティを感じられなくなり、避難民に対して、気持ちを考えないような軽率な態度をとってしまったと述べてきた。

したがって、問題になっている被災者への扱いに対処するために、私たちは東日本大震災にリアリティを感じて接していかなければならない。自分とは関係のないものと考えのではなく、日本のどこかで誰かが困っているのを助けるのは自分たちであるという積極的な姿勢が必要とされるし、放射性物質の問題でも、風評被害に見られるように、見えない不安に左右されるのではなく、世間が混乱したそのような状況でも客観的に事態を捉えることのできる視点が養われる必要がある。リアリティが希薄化することを分かっているながらも、それを乗り越えていこうとする積極的な姿勢が、被災者を受け入れる側である私達の使命であると考えます。

注

1) 上記の状況は、法務省ホームページ「平成 23 年中の「人権侵犯事件」の状況について（概要）」内、「4 添付資料、(5) 東日本大震災に関する法務省の人権擁護機関の取組状況について（別添 5）[PDF]」pp. 2-3 参照。

<http://www.moj.go.jp/content/000095655.pdf>

2) 林利隆「スペクタクルとしての湾岸戦争－劇場型社会とメディアイベント」『現代のエスプリ』400号 2000 至文堂 p84

3) 同上 p86

4) 小川敏正「目に見える現場のない災害－JCO 臨界事故は初めてのメディア独占型災害となった」『現代のエスプリ』400号 2000 至文堂 p92、95、
()内は引用者。

5) REUTERS ロイター

http://jp.reuters.com/article/jp_quake/idJP2011041401000520

私は最初は、有名新聞社（朝日、読売など）が震災や原発問題について、それぞれどのように語っているのかということと各社の社説を比較しながら考えていく、という方法を取り、各新聞社の震災から一年間くらいの新聞を読み続ける日々を送っていたのですが、読む量が膨大であることなど、いろんな壁にぶつかり、結局諦めてこの文章に至ったのですが、ネタは使われなくてもそれから得られるものは大きく、メディアによって、語られる視点は違うのだなと考えさせられました。

後期の間、一番悩まされたのがこの授業で、何を書いたら良いのか分からず毎週この授業がくる度に鬱でした。でも最終的には締め切り近くに、高3のときに赤本で読んだ英語の文章が頭に思い浮かび、震災とリンクさせていき、なんとか間に合いました。調べを進めていく中で、知らず知らずのうちに震災の情報とか、震災が影響して何が起こったのかなど周辺の情報に対する知識も増え、震災に対する理解が深まったと思います。あとは、震災を希薄化させない姿勢が問われているのだなと思いました。

谷口ひとみ

